昨日の政友、今日の政敵

同胞に亀裂

平成六年四月十七日に村上市長選挙が執行された。現職市長の若林久徳氏(六十五歳)が三期目に向かい、現職市議の片野猛氏(四十三歳)が挑む一騎打ちの選挙であり、私にとってはとても嫌な選挙であった。と云うのも若林氏、片野氏共に稲葉修先生の門下生を名乗る同胞であり、私もその一人のつもりで居たからである。稲葉修先生は平成四年八月十五日に既に他界していたが、翌年の平成五年六月九日の皇太子妃雅子さまご成婚の喜びとともに、同年七月十八日執行の衆議院議員総選挙に於いて(前)稲葉大和代議士が後継者として初当選を果たし、若林氏、片野氏を始め私達は共に戦い共に喜びを分かち合った同士であった。本来なら稲葉代議士の政治力を村上市の為、共に活用しなければならない二人であると思っていた。私は苦渋の中、若林久徳氏支援に回った。若林市長は前市長の後始末のような仕事も多く、市民受けするものは少なかったかもしれない。しかし、瀬波ビーチランド問題のように市民、議会の批判にさらされても、村上市、村上市民の将来の為だと確信すれば行政の責任者として批判の矢面に立つ政治家であった。また、厳しい村上市の財政状況のなか、条件の良い新規事業の導入を図るため国・県への働きかけを進めており、これらの事は評価すべきと思っていた。片野猛氏は有能な先輩議員であり、昭和六十一年の市長選挙の時に若林久徳氏が候補者に決まるまでは、割烹新多久の今は亡き山貝博社長と私は共に、片野猛氏(当時三十五歳)を市長選挙の候補者として推挙し働き掛けた事もあった。だが、時は移り村上市を取り巻く環境も変わっている。この時に、片野氏が将来に望みを託し名乗りを上げる事は良いが、立候補はすべきで無いと思った。特にこの頃、片野氏は村上市内における開発事業に取り組み、少し物事を急ぎ過ぎる傾向にあったと思う。開発事業は成功と失敗が表裏一体で、時として政治家としての思考バランスを狂わせる事もあり、この時の市長の職には向かないと私は感じた。結果は若林久徳氏が選挙を制し三選を果たした。以来、好きな先輩だった片野猛氏との間に少し距離が出来たようで残念でならない。

村上市議会議員補欠選挙

平成五年六月二十七日、我々水曜会が議会でオヤジと慕っていた長谷川正氏が癌で亡くなってしまった。容姿は頑強に見えるが心根は優しい方で議会の中で我々がはみ出すと後ろで援護してくれる人であった。長谷川氏は療養の中、六月定例市議会に痛みを堪えて出席してきたが、二十九日の閉会を待たずに旅立たれてしまった。その為、翌年の市長選挙に合わせて市議会議員の補欠選挙が執行された。欠員が二名有り、四人で二議席を競う事になり、私は後輩の高橋則敏氏(三十五歳)を支援した。私が三年前に立候補した際に助けてくれた後輩で有り、よく家に来て市政について勉強をしていた。また議員になって議会で我々の同志になれる男だと思っていたので、若林市長の集会などに出向き一緒にお願いを

して回った。見事に当選を果たし、期待通り一年間よく共に務めた。しかし、翌平成七年の改選時に再選される事無く、同志として頼りにしていたのに残念で成らなかった。

小選挙区制

平成八年十月二十日には初めて、小選挙区制導入による衆議院議員選挙が新潟県知事選挙と併せて執行された。知事選挙は現職平山知事が圧倒的有利な展開で二選を果たした。衆議院選挙は小選挙区制で政党選挙という初めての制度下による選挙。今までこの地より三名の代議士を選出していたのが、一名の選出になってしまった。現職二期目を目指す稲葉大和代議士、白沢三郎代議士と元職二期目を目指す岩村卯一郎氏を中心に保守系三つ巴の選挙戦が展開された。それまで市議会議員として代議士系列という言葉を意識した事など無く、議会の中では各議員支持する候補が違っていても仕方ない位の考えで付き合いをしていました。しかし、一人を選ぶ選挙となると市長選挙などもそうですが、熱が入れば入るほど感情が表れ、しこりまで残るものです。出来る事なら選挙の都度、自身の考えで一生懸命選挙に関わり、政治、行政への関心を高めて頂きたい。そして結果が決まったら、せめて任期の間はその政治家の働き易い環境を保ち監視するのも有権者ではないだろうか。また、当然ですが選ばれた政治家は自身を応援した支持者だけでなく、選挙区全ての人の為に務めるのが使命であると思っています。話しを戻すが小選挙区制での初めての衆議院議員選挙は私も一生懸命に応援した。稲葉大和代議士が無事当選を果たし二期目を務める事になった。悲しかったのは衆議院選挙を終えて、私が稲葉代議士を応援した事で私を支援下さった方が離れてしまう事です。議会の中でもそうですが、昨日の敵が今日の友なら良いのですが、昨日の友が今日の敵になるような選挙後の人間関係は良くないと強く感じています。

政治の連携

政治・行政の場では政治に関わる者が互いに協力し知恵や力を貸し合い、出し合いながら政策実現に向け立場の違う政治家同士が連携する事は常に行われる事です。市議会議員の立場からすれば、自分の提案を市の行政の中で実現する為、同じ議員の知恵を借りたり、賛同者として頭数に入って貰う。また執行者である市長に相談し提案した案件に対し必要に応じた手だてを講じて貰う。県に関わる施策で有れば県議会議員に相談し、必要に応じて県行政や県知事へ道案内をお願いしたり、働き掛けて貰う。国の施策も同じ事で国会議員に相談し知恵や力を借りて事を進めていく。市議会議員、市長、県議会議員、県知事、国会議員、国務大臣は市政、県政、国政と違う舞台の政治・行政を預かる政治家ですが密接に関係し、連携、協力して地域の施策を進めています。

乱立、県議会議員選挙

話しが少し先に飛びますが、平成十一年四月十一日に県議会議員選挙が執行されました。

この時の選挙は、私はあまり触れたく無い選挙の話しの一つですが、避けるとおかしいので敢えて書き込みます。平成十年、年明け早々から当時の斉藤勲県議会議員に対する不満の声が市議会議員を始め市政に関わる方々より出始めており、徐々に大きくなりだしていた。前述した連携・協力の関係が希薄になってきた証しであると私は思った。私は不満を持つ市議達に断った上で、一月下旬に斉藤県議が出張から戻るのを待って自宅事務所を訪ねて会う事にした。そこで私の感じた事を伝え、今のままの市・市議会との関係は良くないので、先ずは当時の宮本金作市議に仲介を頂いて市議有志と懇談会を持つように進言した。宮本市議は議員内の面倒見を良くして下さっていた方で皆に信頼も厚かった。その宮本市議からの要請であれば皆も快く受けるだろうと考えたからであった。しかし、斉藤県議は私の話しが寝耳に水だったのか反応が無く、自身で考えてみるとの事で話しは擦れ違いに終わった。四月十九日には村上市長選挙が執行され現職若林久徳氏が四期目の当選を果たし、自民党村上市支部も次は県議選へ向けての準備に入る時期が来ていた。残念ながらそれからも両者の溝は埋まる事無く、交わる機会も無いまま次期県議会議員選挙の自民党村上市支部対応を相談する役員会議が夏近くに開かれた。役員会議を何度か経たが現職斉藤勲氏に支持はまとまらず、自民党村上市支部として候補者の一本化は図れなくなった。この頃には私も今のままでは良くないと考え、現職に異論を唱える市議達と行動を共にし、新たな候補者探しに加わっていた。なかなか候補者の選定が決まらないまま時間が経ち、私もそうであったが皆は少し焦りも出て来ていた。八月頃には我々とは別な関係から意欲を示す候補の名前が一人二人上がってきた。そして我々、有志市議自身も候補者選定の対象となり考える状況になっていた。私も十月に入り、私の後援会の役員である加藤悦郎氏、斉藤与志守氏、本間清氏、小田正彦氏、佐藤睦氏に集まって頂き私自身の県議選出馬について相談した。皆さん期待と心配が交錯して答えは出ませんでしたが、一ヶ月の期間を貰い私自身が決めて報告する事になりました。結果は私自身が県議選に出馬する環境を整える事は出来ずお断りする事になってしまいました。続いて岩倉幸治氏が意志を固めてくれたが、出馬に至らず候補者は決まらないでいた。他方、同じ市議の中から山貝明生氏、元市議で前回市長選挙に挑戦した片野猛氏が出馬を決めていた。我々は十二月に入り、大野進一市議に翻意を促し、本人が決意を固めるところとなり、一月に入ると選挙運動組織の一員として関わる事になった。県議選の二週間後、四月二十五日には村上市議会議員選挙が執行される事になっており、私は三期目に向けての選挙であったが後援者の皆さんに自分の事はお願いし、私は大野進一氏の選挙事務所に入っていた。四人で一つの議席を争う熾烈な選挙であったが、三百票差で大野進一氏が当選し、県議会議員として村上市政と連携・協力して務める事になった。

市政雑感

平成二十年四月一日に合併し、新村上市が誕生した。村上市長大滝平正氏と三十人の村上市議会議員が選ばれて三年が経ちました。この間、市長に対する批判、市議会議員に対

する不満が大きく聞こえてきます。選ぶ側にも選ばれる側にも村上市民として、市長・市議会議員として義務と権利を有する村上市に果たす役割があります。お互いにその事を自覚して支え合う事が町づくりの原点ではないかと思っている。また、市長も市議会議員も地区代表や自身の支持者の小間使いで無く、七万市民の代表として村上市の行政と議会を担っている事を忘れてはならない。市長や市議会議員が村上市の議会を舞台にして自治法・条例・会議規則等を無視した独裁、馴れ合い、傷の舐め合い、隠ぺい会議などが行われているとしたら、村上市政が混乱するばかりか政治、行政の過疎市となり、それこそ市民を政治家が陥れる事になる。為政者が為政者足らんと為らねば、村上市民が不幸になる事を肝に命じて行動すべしと考える。